開國起原

伊5
2110
24

2110
24

宮内省圖書寮

外國人殺傷事件 下

文久三年戌八月廿三日於横濱外國奉行津田近江守英公使シヤルセタフヘール對話

一扨今般不慮ニ異變ニ而 大君ニも沙心配被遊候其許ふも嗟驚愕ニ致ス事ニ有之歟誠氣ニ毒ニ至ニ候 痴人ニ如何ニ拒ヲニ有之候

哉

右之儀を昨夜汲書翰に老中方に委細申上
し儀に御座候旨伺桶に尋有之候ハヽ只今
一通り申上し而も宜敷候

一實に氣之毒之次第に候政府に而も甚御心配
有之疵人之拙子等兼知し為し度事に候
即死し候しし者を疵所或拾ヶ所も有之落
馬いたしし後散々切きざみし儀を拵候兼
又し御を駕籠に乗居し重立し者乃差図
以為し咽喉を差通し留めを為致申候壹人

海舟書屋

を脇を切落候計に御座し壹人を腹に三ヶ
所疵有之し壹人を婦人を而右之異変に打
驚火急に馬に鞭打て逃来し御共芸多中同拙
に御座候

一壹度ならず二度三度右拙之儀有之何共申拙
も気之氣之毒之至に

右を何者之所為と被思召し哉

一屆之趣に而を薩州之一門鳴津三郎之家来と
も申又を右家来之中に浪人抱之居右浪人之
所業ども申候

法申聞し趣を信用不仕偽言を為し決而浪人
こと等之島津三郎殿家来の中小相違等之と
存候
一政府にて而も島津殿家来と法疑有之候間其筋
に法違有之儀にて而殺害いたしたもの鴻津
殿家来こいつ直に取押調も出来可申と其
許ふも可に存に法得共我國の法にて土地人民苦
大名に法但世相成居に事を政府にて直に取
調に儀こと糸り兼に薩州に法決有之候得
も薩州にて而取調政府に申上に儀に有之十分

海舟書屋

ふ法事置約屬に事に候
外國人を殺害いたしたもの法引渡相成可申
哉兼知仕度候
一政府より薩州に法決有之殺傷人知し次第法
所置有之に事に候
今般の儀を長く法所置振を相待に儀を出来
不申先般東禅寺一條を六十五六日目に法
返翰有之右振遅々致しに儀を不相成に
一和親を不破振に為し度政府にて而法心配有之
勿論差急き取調方種々法差図有之に事に

一昨日異変ニ節軍艦ニ者共右乱妨以ノ外し
いもの乙ニ付果申度ニ多人数上陸人心動揺
いたしニ付其右様致しニ而ニ甚不穏ニ同
私差留平穏ニ以ノ外しニ右ニ殺害いたし候
ものニ島津ニ家来ニ知し居ニ同政府ニ當
然ニ御所置有之ニ儀ニ存候右ニ儀ニ而も
私方ニ而毎事平穏ニ以ノ外しニ意ニ御ニ至
相成ニ儀ニ存候此儀ニ付御ノ前様ニ私ニ
御談判いたしニ儀も毎益ニ御疎ニ同長談
ニ不仕候委細ニ御老中方ニ以書翰申上候

海舟書屋

儀ニ御疎ニ唯今願置ニ殺傷人知しニ以ノ取
押私方ニ御示しニ有之ニ様奉願候様又一事申
上ニ條約ニも有之ニ十里四方游歩ニ地ニ
何地ニ不限番卒ニ差出有之非常ニ節乱妨
人取押方ノ届ニ様ノ以ノ度四五千ニ兵卒
有之ニ以ノ届可申左も毎ニ而ニ條約通り
十里四方游歩ニ勿論所用有之ニ而も通行
出来不申外國人更ニ安心ニ場合毎ニ様相
成可申候
一横濱ニ出口ニ以ノ戎十里四方ニ界ニ戎

條約ニ有之ハ十里四方ニ限候ハ何如ニ浪人潛
居以為ハ哉私方ニ而モ更ニ存不申ハ日本ニ
而法所置無之ハ而モ不相成筋ニハ右十里四方
游歩致シハ儀モ素より勝手次第ニ儀ニ而右
と差留ハ儀モ出来不申候
一十里四方警衛ニ儀モ多人數ニ無之ハ而モ行
屆不申旨体此儀此席ニ而取極ハ儀ニモ無之
兼ハ間拙者帰府ニ上法老中方ニ申上候様可
致候
勅使大原左衛門督通行ニ儀ニ付法書輪ニ而渉

海舟書屋

達有之ハ変今日通行ニ儀モ見合ニ相成候病
氣ニモ可有之哉品川驛ニ止宿致ハ右ニ付今日ハ
品川驛ニ外ニ外國人遊歩差支無之ハ
七日ニ間自國人民游歩差留置ハ間右七日
ニ中ニ番卒ハ用意有之ハ様仕度候今日通
行差許日ニ碍て他日尚又差留ハ儀モ出来
不申候
一今日ニ差支無之ハ游芸猶通行ニ節モ申入候
様可致ハ間其節モ暫時ハ差留ハ様ハ為ハ
此段頼置ハ

警衛ゝ兵を肝要ゝ儀ニハ間ハ帰府ゝ上申
上可被下候
一公使ニも定て驚愕ニ致ハ儀と存ハ
島津三郎通行ゝ節何故私方ニ為知ハ之
哉
一其儀を是迄諸大名東海道通行以ゝ節何
ゝ差支も無之ハ間別段達も不致ハ故以来ゝ事
を相達ハ拙ニも相成可申ハ
京家ゝ方通行ゝ節を即達有之何故島津を
沿達無之哉

海舟書屋

一勅使を高貴ゝ方ニ有之ハ間通行ゝ節相達候
得共大名を政府ニ属しハ者の儀ニ付別段達
不申候
薩州ゝ藩悪黨夥儀を兼て兼知以ゝ如し
居候京都ゝ方を都而薩州ゝ方ゝ宜可有
之ゝ存候
一一昨夜薩摩ゝ家来馬ニ而通行いたし候変佛
國人ゝ内鉄砲を打懸ハ得を落馬以ゝ如しハ由
其筋ゝ申少落馬いたしハ者天水桶ゝ蔭ニ
潜ゝ逃去候由右を其許ニ関係いたしハ儀ニ

と無之ハ得共為念此段申出置ハ

薩藩刀を拔候故ゲウエールニ而突落し

ハ由兼り候右拔き者ハ百人落命いたし候

とも聊ま細無之と私と存候

一神奈川奉行支配向も鉄砲ニ而傷受ハ由兼知

以ゑ〳〵候

右等ニ間違と品〳〵可有之追々ニ引合いたし

ハ而も直候

一公使ニ申立ハ武ヶ條と帰府ニ上政府ニ可申立

候

七日ニ中ハ警衛〳〵番卒ニ用意有之ハ拔可

ニ成候右と一時ニ事ニ無之向後十里四方

ニ十分ニ警差出置ハ不堅くハ

一政府ニ申上何レニ接拶可有之候

東禪寺一條も今以纏り候儀と無之尚又今

般ニ異変有之ハ間其遣事ニ警差合ニ所置無

之ハ而と不相成儀ハ法度候彼方五十人ニ

而張出ハ〳〵警衛人数と百人ニ申拔ニ無之

ハ而と不相成ハ一両日中ニ私出府以〳〵ニ沙

先中方ニ申上候次第有之候

海舟書屋

一兼知仕候し候

同日佛國公使對話

一一昨日も不慮に事出来拙者共始驚愕に至其許於而ハ心配不少儀と存ハ

大君にも御心配に儀ハ御察申上ハ左右拙く

儀度に出来に付而ハ御防方御所置等之ハ半

而も沙氣に毒に儀に存ハ

一佛人も別條無之琉童に存候

佛人も其災小罹り不申ハ得共敢而誰彼に差

別無之只々外國人を目指しハ拙存候

一素より被申ハ通り事に而銘々運り

ハ儀に而佛人不運にハ得も則其害に罹り可申

候

右拙く変事有之ハ節も護卒始先人氣立ハ

同高官に者ハ專ら取鎮方所置致し候立ハ

変事に節も壹人も即死者人ハ落馬以外し

居未タ命脉有之ハ変日本人方に而も更ら

差構不申外國人方ヶ而盡く取始末致し候

事に而不都合に儀に有之ハ

海舟書屋

一右之廻り方役人之者間ニ合不申内小甚方ヲ
て取片付ハ幸ニ而敢而差構不申譯ニ之無之
候只今英國公使ハも申入置ハ殺害人之種々
風説も有之島津三郎之家士ニ可有之趣ニ候
濟共以海之名前等も不相分ハ間何分難取押
且其許等外見法致ハ濟之直ニ捕附可申ハ可
江思ハ濟共日本之習風ニ而左様ニ之難出来
先ハ政府ヶ同家ハ申達しハ上同家ニ而穿鑿
致し差出ハ手續ニ有之ハ間左様心得被置度
何之ニも右罪人之捕濟ハ積りニ有之候

海舟書屋

島津之大守之此節立府ニハ哉
一在國ニ候濟共江戸表ハも屋敷有之京役之者
も立府致し居ハ間右之者ハ相達しハ濟之速
ハ相通し可申候
素より島津三郎之家来と申儀之兼知致
し居ハ同人儀唯今何之ニ而扁驛ニ旅扁羅
立候哉不存ハ濟共追而追駈ヶ同人家来之
内穿鑿致し反押ハ儀之只今仰之趣ヲ而之
段出来ハ哉
一左様ニ之ハ濟共多人数借連之中面倒も不相分

姓名も相知不申候間穿鑿致しは譯こそ難相
成候
家来こ致しは悪事を何也ふも其主人こ落
度こ付引受申訳不仕候而こ難相成事こ付
惣人数取押相紀しは成こ出来不申候哉
一何分被申候通りふこ難相成候
左様こいつ一事相同は十里規程中佛人
等遊歩こ多人数こ而こ両三人一昨日こ
如き乱妨相働きは者方こ候共も取押は儀
こ難出来は哉

一右こ其時宜こ応じ候事こ而拙者共とは〻とも
其場に差越り候得こ取押は事こ而一昨日乃
如きこ多人数こ而混雑致し且其場こ不相係
双方物別こと相成は儀こ而何分取押は事難
出来は
リチャルトソンと申者は切捕は者こ三郎
乃駕籠脇こ者こ而餘り下賤こ者と見こ不
申候其邊紀し者之はいつ分明可相成
候
右英國人を取圍候儀こ下賤こ者こ致し候

こと毎之重立申い者乃命と存い
只今仰く趣こ而と日本く習風こ而此程く如
き乱妨人と以へとも大若く家来と直ち取押
い儀と難相成甚主家ち所達し方之甚上立
家こ而捕押方致し可申との儀こ而と十里
規程内と以へ共外國人共安心致し遊歩致
しい儀と難相成候
一右く儀こ付英國公使申立候儀も有之候こ付
政府ち申立何と欺評議以くし可申候
素ら日本政府於而外國人の性命ち請合

海舟書屋

毎之上と此方の護卒を以て弥厳重こ警衛為
致いらり外毎之候
一何也ふも政府ち申立警衛向尚厳重こ可取計
候間右ち欺く儀と危角人心こ差響不宜候間先
ち見合い取以為し度候
右警衛く儀ハ政府ち法申立有之法所置相立
い後ここストルち被仰出い取仕度候
私心附い丈ケく儀中上い政府於而外國人を
保護ち成い法有之有之ハハ尚此方勘辯く
変委細法相談可中上候

一心附う度は丈く儀を被申立は拙以為し度は
是迄佛人こと等右拙く害こ罹りは者安く右を
全くこことストル乃取計一ツふ出は事こ而其
職ヨ不肖儀と存は條約取結は上を和親く儀
第一こ有之は右拙く儀出来は濟を自然和親
く安寧こ差置は儀こ付拙々意を用ひ候事こ
有之候尤此後警御く儀こ付ケ拙ここふ可取
計旨法申越有之はは、双方不都合安之拙沙
相談可仕候
一至極尤く事こ而右く趣委細事務執改は申立屆

海舟書屋

く相談は致は事も可有之候
警衛向法相談く廉有之はは、出書送有之度私
心附候丈を可申立は外國人共安心致し候拙
警御向法取計有之は儀當今く第一儀こ方之はは」
開港後数度殺害発起はこ付外出人共く人氣
騒立彼人こ而も拔撃ケ中間數哉抔懸念致
し候こ付自然不穏事こ而且所國人も外國
人り對しは節刀ふを撃ケは拙く儀安く
拙取計方専一こ有之候
一大原左衛門督今日神奈川驛通行く積り有之

以ては昨日品川驛に滯留江戸に立寄りは致又
と帰京相成に成不相分は浮共赤日神京川驛
八通行不致に同外國人出行致しに而不苦に
兼知仕候此後法同人帰京之節も矢張東海道
と候哉
一多分は東海道と可有之に
法同人通行之節も三郎の如く供連多人数
と而悪徒も推り居に哉
一供連多人数とも可有之に浮共右様之者と有之
間敷候

海舟書屋

ミニストル出行致しに節と護卒共石連に間
一昨日の如き変ふ出合に共防き方と有之候
浮共商人も左様為り兼に間今日も法同人通行
相延に共其他悪徒共通行致し不申に間商人
等出行致に共危き事変との趣由請合有之に哉
一先方様之儀変之事と存に
商人共に觸示しに事ふ付疑も致しに故挨拶兼
知致し度候
一福ふ罪りに事と自分共と身上とに〆どうも計
らまとふ事ことに浮共先外國人に對し乱妨

相働ミ居候者ども有之ニ付数度将共隨分心を被
用居候致し度候
東海道邊ハ取締行届居候ハ故相同度既ニ一
昨日福ヶ羅りハ者共ども鉄銃等も勢〳〵不申
候間右様不覺を取りハ事ニ候間出行ミ節
ども五發砲等所持いたし不申ハ而ども石相成ハ
ニ付相同ハ事ニ有之ハ
一何も心懸りミ儀ども無之ハ將共當節ミ変を除り
遊歩ハども出行不致様ハ取計度河邊夫々改府
ニ而取締向も可有之間夫迄ミ處ども見合候

海舟書屋

様致し度且其方ども無念ミ儀ども存候
法ハ決ミ越至極法ども將共條約ハ遊歩
規程も有之ハニ付無念ども將共差止候事
ハ難相成ハ間出行ミ節ども鉄銃等相勢自分
警衛致しハり外無之候
一事申上候
目印有之ハ警衛ミ役人神奈川川崎ミ両間ハ
石地騎馬ニ而見廻り居ハハ外國人共ども安
心致し可申只今申上ハ目印有之ハハ〻ハ違
ども出来中間敷存候一昨日運上所ミ役人ミ

中銃創を蒙りし者有之は左右痛所見受候
変僅こと有之は滑共氣く毒く事こ有之候
右を自國護卒く者変事有くし場所に居越
人氣荒立し節故見認違ひ打発し事こ而全
く過誤こ有之し其節私も誤り居越相制
しし滑共約居不申右拵く次第ふ至り心配
仕候
一過誤有之し滑を致し方安之し創傷も軽き越
こ付安心以為し候
運上所の役人ふ右拵く儀出来氣く毒く至

海舟書屋

不存し赤く混雑中く事こ而有之し滑共目印
有之しハ右拵く違を有之間敷存候
其外小一人馬上こ而居越し者有之刀を抜しこ
付鉄砲打拵ケし変落馬以為しし滑共其後何
方へ欲逃去申候
一右を三郎く家来くく傳兼以たしし
左拵こし哉も難計し
一変事こ付而を其許ふも驚うれし事こ可有之
氣く毒こ存候其許ふを久く立留此方の事情
も心得し居し間此後外國人共騒立不申拵取

鎮方江取計度ハ
私も明日ゟ處ゟ治定石数ハ潛共一両日中小ゟ
出府ゟ心得之有之候
以川須左衛門督殿ゟ通行ハ致ハ哉
一江戸表ゟ立戻ハ哉又ゟ明日頃通行可致哉相
知之不申ハ間相分り次第為相知可申候
兼知仕候

薩州家ゟ差出候書付

島津三郎下向ゟ節於生麥供方之処岡野新助
英國人を切付其後何レハ立去候哉之付外國
人共ゟ再應苦情申立候趣ハ疫ハ由ゟ而嶋津
登兵私江呼委細被仰渡ハ趣具ゟ旅中ゟ申
遣ハ変尚又早速巨細ゟ之付取調ハ潛共何分
今以行據相知不申候併此者儀ゟ何之小も石
捕差出ハ心得ゟ居疫候間暫沙猶與江下置ハ拙
奉願ハ右ゟ付而ゟ其餘携ハ者も可有之哉々
取調可差出旦又右一件其場ゟ次第相心得候
者ハ戻ゟ可差出ハ拙江仰渡供頭山口彦五郎

海舟書屋

と申者差出町内奉行校二而治尋有之ハ得共先彼
列内ゝ儀二付委敷拵ゝ分兼ハ二付先供ゝ
内二而古次第相心得候者両之人可差出治達
し有之趣精細度ゝ沙汰兼知仕其都度々々
其節彼人共ハ細々申含旅中ハ差遣候事前文
申上ハ通精ゝ取調ハ得共何分勇壮ゝ若者共
数百人有之行列ハ立障り候二付新助取計候
事二而假令尋當ハ得共可差出筋無之行列ハ
無礼相働ハ者と打果ハ古來ゝ國風仕來候
旨申立其場ゝ拵ゝ混雑中故外二誰ゝ拵ケ拵

海舟書屋

と見留ハ者も素ゝ無之先供ゝ内分差出候
迚も治請答難申上趣二而夫々差出候事ゝ
我々一同被差出度拵申張張立騒立も可仕哉
ゝ形勢治疑候此上取調ゝ致し拵も無之候就
而ゝ於
公邊沙汰直敷外異芸ハ被仰渡ハ下ハ而も兼
伏不仕方一國許ハ軍艦差向ケハ拵申出候ハ
外二致し方も無ゝ事二ハ国薩州二渡来仕候
得ゝ
皇國ゝ御威光不相汚ハ拵精々穏二取扱應接

以為下ハ拙可仕候間右ニ趣可然被仰諭被下
度候可申上旨三郎申付越ハ以上

閏八月廿五日　　松平修理大夫内　西　筑右衛門

英國公使ゟ生麥殺傷一條ニ付差上ハ
書翰ニ付返翰案評議仕申上ハ書付

外國奉行

西洋十一月十四日附ニ而英國公使ゟ生麥殺傷
一條ニ付差上候書翰中既ニ両月ニ久數を歴

海舟書屋

候得共更ニ的要ニ事實ニ報知無之此後因循
打過ハ而ハ政府御扱ニ利害曲直ニ大關係可
相成趣等認有之其餘不穩意味差含ハ拙相ゟ
且取留ハ儀ニハ無之ハ得共長崎表渡来ニ魯
國船將ビリレクと申者ゟ咫人共上陸かゝ
軍艦四隻薩州表ニ可差渡用意致シ居立尚其
時直ニ寄佛朗西字漏生等ゟも加勢ニ軍船
可差渡旨會議も整居ハ趣通詞共ニ彼ゟハ儀
有之哉ニ由風説兼込有之魯國船將名ゟ離
間ハ為シ候一時ニ流言ニ可有之哉難計ハ得

共先般東海道附替等之儀ニ付私共英佛両公
使ニ談判之節々屢度意有之口氣も相分候変
彼方ニ生麥一條ニ携ル者共数人昨庚方
江御建本人相分り次第罪科ニ素しニ成諒然
たる旨をも御返書ニ遣ハ將共以後之丈々御
呼出方ニ御運ニも不至若此侭時日押移り候
ハヽ彼方於而も御呼出無之儀ニ押量り前書
御返輪之趣等ニ基き猶書簡差上ル儀ニも可至
哉其節ニ至り判然と以為し候御返簡不被遣
ハ而も政府之御威權ニ而も御所置難出来事

海舟書屋

と相心得可申哉ニ付御威光ニも拘り候間以
川を以も為之申上ル通り速ニ殺傷一件之者
御呼下無之ハ而も彼ニ御返簡之被差出方も
無之殊ニ先般私共ニ為一覽御下ケ有之候修
理大夫家来共島津三郎ヲ申付越候書面之
趣等元ヨリ暴論ニ而　公儀ニ對シ而之申
立方ニ無之ハ変右をも甚侵ス差置候ヲ其
藩士共自負仕ル儀ニも有之ハ哉不容易書類
をも敢而秘し候心得無之哉ニ付察内密中立
ハ趣世上一般流布仕居既ニ前書私共ニ一覽

法下ヶ〻書付抔も一般ニ傳播いたし居候儀
ニ而外國公使共拵て平常法國地ゝ法模抵候
探索立候故世評等ゝ勿論巨細ゝ事実傳ゆ孤
立候廉も不少候間此度薩州家生麥一條ニ付
申立ル書類抔ゆ知いたし居ゝ儀可有之も
難計ル間沙呼出し方法達相成ル上右ゝ趣并
刑部卿殿法上京夫々法所置有之ル沙次第柄
等此度ゝ處ゝ各國公使一同沙呼出ゝ上昨今
ゝ事情打明ヶ法談語相成舊來ゝ御國風開鎖
之衆議區々ニ付此度刑部卿殿沙上京ゝ上ゝ

海舟書屋

凡箇様ゝ法合も有之ルとの法趣意委敷法説
諭ル為立以ル事ふも改府ゝ取扱ゆ世置候ハヽ
双方ゝ都合可然候法談有之ル外有法疎間敷
哉右ゝ趣可然も仕思召候ハヽ此度ゝ沙返翰
中ふゝ只々沙面暗ゝ上委曲ゝ事情法委し可
ル為立趣被仰遣ル旨ニ取調可申哉奉存候依
之私共限内評仕ル趣中上候以上

戌九月

譯文

千八百六十二年第九月二十五日江戸ニ
立ル佛國ノ使臣館ニテ
日本國高政府の貴き執政諸官ニ呈ス
大君の政府條約を直ニ施行ス可ハ其國内ニ
混雜生ス可キ以ヘカラサルヲ以テ欧羅巴ノ諸國大
君ノ政府ニ甚混雜を避ク可キ方ト我望発ス
最初ノ證據を無ヘシ時此外國政府ハ其ニ
ル好意ニシテ且ツ定例アル方ノ證據ハ粗
暴を以テ受ケラレシ然ルトモ文明ノ世界
ノ人其取扱を見て之レを罪ナシ許セ方

海舟書屋

ニ方ノ所ニ
西洋諸國ニ於テ之を決シテ此の如き事件を打
捨て置カサル方ノ方ト確然たり
今非議ヲ〳〵カラサル程ノ好意ノ證據を共ヘ
て此悲痛ヲ〳〵き西洋諸國の人氣を鎮むるを
大君政府の務ニ
當て台下余に告て貴國ノ人民ハ外國人を仇
敵の如く思ふと以ヘ
余謂ふらく貴國の民心其一部を迷ひ居ル
方と實ニ然る所ら理あり然ルトモ貴國ノ於

て其民心を再ひ善道ふ移らしむへき法術を
十分施さゝ可しとをも亦信せり
此他余謂へらく若し我両國間ふ存立を保良
き交誼を正實ふ考ふる時を此國乃住民中其
良き交誼ふ對して仇敵乃如く思を保者を
十分の一もなからるを
外國人ふ拒敵を保者ハ他の住民を支配を
人ふして即ち日本乃國民中商議をなし及ひ
双刀を佩ふる免許を得たる種類中の人ふ於
ふと を真実ふして且確然たり○然るとも此

海舟書屋

種類中乃人ふも外國人と交ハふふとを好む
者多くこれあふふとも亦確然たり○実ふ拒
敵をなを人も若し次件乃實事を以て告諭し
且ツ理會せしむ至くふを時を其説を変を於
者多これあふ至きふと疑ひふし但シ其実事
を即ち諸外國ハ甚日本人の官職及ひ政府乃
威權并ふ大君の威權と凌くふとを欲せを却
て日本と和親乃交誼を保存せんと欲をとい
ふふと之レなり
此他台下余ふ告くるに大君の政府を強き改

府ありと以へ是而して我レ甚タ満足を以て
此告知を聞きり其故如何とかれて我レ甚告
知を以て台下我レ丁両國乃良き交誼と保存
さ陳ら諸樹を要へ得色紀を望先さるり○
此諸授ハ下件乃如し今台下之レを我レふ要
色没へし即ち
第一外國乃「ヂプロマチーキアゲント」ふ對し
諸件を公然と打明さるり其故を台下さ
我ら同盟國と同拓他の國に緊要ふ既事件と
之を所置さる事とふ就き貴國の方に起きる

海舟書屋

諸件を公然と其「ヂプロマチーキアゲント」ふ
告くる職務ふれさるり
第二「ヂプロマチーキアゲント」ふ其政府乃命
ゝ由て任しら是し官職ふ帰さ所の尊敬を
公然と顕さるとるり但し其政府さ其「ヂプ
ロマチーキアゲント」を日本ふ送りたれさ其
名代人の叮嚀ふ取扱さ且ツ台下乃説を外
國乃政府ふ於て聽く如く台下も其名代人乃
説を聽き且ツ理會せらるんふとを望めり
第三、其アゲント」及ひ其國人乃安全ふふ古と

を保證することなくてかり然るとも台下其安全か
於ことを得さしむる法律を立ゝるため其人
の自由を妨け又其好愛する所のものを害さ
るゝことなかるべし
第四外國人の為メ聞きたる所諸港中に於て
乃諸件の取扱ひ方なり○商事を支配する日
本政府人を貿易のことを隨意ふ所置さく
らに○其役人の屢々なせし如く條約を以て
嘲哢を企からさる○概ね以へ台下外國と
乃貿易を隨意ふるものを恵むを要するか

海舟書屋

り而して之しふ由て港を閉ゝること乃代り
ふ却て日本國中乃諸港を開き別して大名乃
其領地ふ立る港を開くを願ふ者を何時ふ望
ミ及ひ如何なる條約束ふて望むとも其港を開
くこと隨意なる由を告知し且ツ其大名乃虚
言をなすさ法ふと城望ミ及ひ事情ならさを自ら
之レを引受け申譯なを企しと誓約せしむる
こと須要なりとさ時々之レを望むへし
第五、台下乃諸所置と以て台下を正直ふして
且ツ永久の法と以て世界中他の諸部と良好

る所交誼をかたを欲こゝふたと我顕を之レ
南利
條約上より自然生し素る外國人の所業ふ由
て貴國或生ゆ乃諸侯等思ひ誤れる流と起を
爲こゝたとを台下屬を證明し且ツ事起る時
別して之レを證明し済たり○台下此乃如き
場合ふ於て八台下の友人なる諸國民乃説を
採用して絶へを良好の交誼とかを台下乃良
心の證據と無ふ爲し是レ日本の多小の一部
へ暴戾ふ拒獻をへきたとを許容をるより却

海舟書屋

て勝をりとを組こ此拒獻をふたとり由て爲
不測の難事生をへく且ツ此暴戾ふるたを
條約を取結へふ諸國大君政府の申譯を要を
ふ二乃愁訴とかを時ふ顕を所乃平穏ふし
て且ツ適宜ふ於事と爲大ゆ相違せるたを我
見せしむるより
第六外國人ふ對して日本れ模拓を條約り於
て明りふ之レを記をと以ふたとを全世界乃
國民ふ公然と顕をたとるり組こ其條約を日
本全國中の諸侯即ち公子及ひ其臣民ふも共

ふ関係して全く廢を面からさ法律とるし
見ふと要を
日本國の習俗ふ從へハ法令を再議を施為メ
毎年一度會合をるを例り○此會合を実ふ其
國乃諸大名より成ル○何故ふ此會合の時
名日本人ふ外國人へ對して紹ふ所のふと示
せる別種の法律と異へをるや○日本ふ於て
を新法を以て古法を廢を法ふと然ふ以と台
下恐らくハ以ふ面き年○余是レふ答へ云
を人此古法を廢をる事ハ世界乃諸國民ふ於

海舟書屋

て之レ有ふふとふして且ツ貴國の幸福乃為
ふを此の如き事を施行をるを要をるなり○
千七百年代ふ於て を日本の法律外國人を待
遇をる乃特ふ篤かりし○此事暫く止を
をとも當今再ひ古へ乃如き関係を起せしふ
ハ甚タ賢明乃事ふ○故ふ再ひ彩ふ世
界の他ハ諸邦とのを良を交誼を固定し十分之
を進むふを要を其故如何とるハ我を只此一事
乃ミ此國の大平と不覊獨立を保證をるを
る面乃事ハかり

外國人をして悲痛せしめ且つ驚怖せしむる事件ハ既ていハ余今云ふ所し此乃如きる件を防ぐ為メ嚴酷ハ法律を施行するを要さと帝國日本乃軍法の一ハ各貴人（さむらい）を兵器乃使用を習熟するハ必要なるものとを命したるも然るとも其兵器をハ悪意を以て徒らに用ひるものとハ決意するとも亦要せず○又タ國主乃家臣ハ悉くたる他の法律ハ各其者等帝國の法律と殊く保護する為メ絶へて決目的を要し且つ自分悪き所業をなさるこ

らるものとを命じたり

此普通の規則ハ依れハ大君の政府を外國人ハ對して殺害をなせし者乃刑罰及ひ別して近来川崎と神奈川乃間ハ立る公領の市街ハて島津三郎の供をしたる薩摩侯乃家臣乃かしたる殺害ハ就て各別段の法律を立ハるハと必要なるへく見ゆるなり

外國人の安全を保護する為ハ如何なる方法ありやの○日本全國乃從順をハと要したる告諭ハして外國人を大君乃良き待遇と受く所

しと以ふ公然たる告諭と西洋の諸政府條約
ふ調印せし時日本ふあるべしと考へたる如
き全國乃良民待遇を受くへき旨の公然たる
告諭とをるをもおせの外余尚も大主目なる所之箇
乃條件政下ふ示を即ち
第一、東海道を避け外國人の為メ許したる
十里以外に新道を開くこと〇此道ハ未タ古法
を頑守し其約裝を変革するを欲せを所日本
諸侯の倍連乃為メ此を置し〇外出人と
内地乃人と習俗の違へるより生したる所當今

海舟書屋

乃如き流血を伴ふ至る不和なる事の再ひ起
るを防くた処双方習俗の異なるこを能く
理會をるふ至る迄此乃如く新道を開くハ甚タ
良法なるをとをへし
第二、江戸表ふ外國人の住宅をる十里〇の法
通路へ也ニ別段の番兵を置こと余ふ於て甚タ
必要なりと思へり但し其番兵ハ法警察の時
ふ當ふ外國人を保護し彼ハ祖の人数ふ拠
るへし〇此人数ハ変ふふ隔て定めれるる書
面中ふ於をべし而して此所ふて外國人ふ

況さる時ハ兵技術と保護を況るあり○此書
不ハ見ふけの為メの目的を建つへし○其士
官ハ騎馬ふく其持場を見廻り且ツ兵器を携
へ及ひ兵士官ハ如何なる位階の者ふて
も喧嘩をおさんとする者ハ之レ反抗すべき
十分の威権を携ふるさと最も必要の百姓メか
り○此書兵ハ何色の法度の家臣及ひ如何なる
位階の人士官ハ若シ其者外国人を因縁
あらしめ及ひ襲撃する時ハ其名士官を右捕ふ
へき相応の威権を携ふる為メ別段の法律を

海舟書屋

之らるべし○此士官ハ已を況さる時ハ而て外
国人の依頼をべき保護人あることを外国人ハ知
らしめんが為メ目印を佩ふるを要も
第三、外国人の為メ定メられたる十里内ふて双刀を佩
ふる法日本人ハ其刀の柄より半ハ出る迄袋を掛
けて佩ふるを要を拘らされバ右捕へらるゝ罰を
受けさしむへし此事ハ外国人の不意の警戒ハ迄
ふまとを陥くるへし而して又々第九月十四
日の如く殺害ハ迄人意ひあるべけをハ日本の
名誉を保護をべし

外國人を保全するとの趣き尚ほ添加すべき數件あり○余兼ねて其事を認き余が記を謹て台下に告べし○余今日謹て呈せし不の說を台下熟考し給ふらんことを求るのみ恐惶敬白

佛蘭西國の全權ミニストル　チュセンデ、ベルクール　手記

ウエーウエー　譯

文久三年癸亥二月廿一日井上河内守殿薩州家來吳出海に出神奈川表に渡来し英國軍艦水師提督薩

海舟書屋

形表に相廻り品々申立致候趣同出公使より申立候右も外國に接待し地に無之候旨說得為致に付苦敵し返答も不待卒爾に軍艦を差廻し拒ら儀無之共難計に付此段為心得相達し事

同年二月廿六日夜於京都松平春嶽相達

今度英國軍艦差向申立候趣難聞屈事件に付應接し上彼より必可開兵端形勢に候間其心得可有之に事

右ゝ通被　仰出候仍申觸ル也

同年二月廿八日同断

昨戌年八月島津三郎儀江戸出立ゝ節於生麥
英吉利人両人打果候ゝ付國々ゝ北度横濱
港ゝ軍艦差向ゝヶ條申立ル変右ゝ難聞屈筋
ゝ付其旨及應接ル間速ゝ戰爭可相成儀ゝ付
此段相達置候也

右両條ゝも立京ゝ諸家ゝ被仰渡ル由江戸
ゝ而ゝ此段達ゝ之

海舟書屋

大目付目付建白

英軍艦渡来ゝ儀ゝ付中納言殿ゝ為書通和
泉守殿周防守殿ゝ寫通ゝ趣熟考仕ル変
内外ゝ御大患ゝ付恐入候詰ル處　還御迫ゝ
右事件故活撥扶ゝ難江成一同死力ゝ盡シ説
得ゝ外ゝ無之ゝ乃活文言事実無活振活次第
ゝ奉存候素ゝ見据ゝ無之候得共彼願意ゝ
通償金被遣ル八ヽ内患ゝ卒示ゝ差發
御上洛中江ゝ外ゝ儀ゝ奉存ル外患ハ其禍大

こと候得共彼こそ西洋こそ文明國と名こそ戰爭こ
と及申間敷左候ハヽ死力を盡し有無こそ挨拶
還御迄被成兼ハ段々宅ニ江戸呼ハ歟又ハ若
年寄こそ内樋濱ニ出張こそ上懇々及應接ハヽ
説得も一時ハ屆可申哉こそ存ハ得共彼こそ於て
還御迄こそ延期兼諾仕候廉を以軍艦碇泊こそ諸
費をこひ可申欤去迚 還御濟據夷期限内
決こそ相成居候事ニハ得こそ足ル 還御後ハ挨拶
こそ越こそ被諭ハこそ外国所置有之間敷就而
こそ最前御書翰を以 御上洛ハ日限ハ連相

海舟書屋

成ハ節彼こそも書翰を以申立候趣も有之候
處御返翰被遣置ハ而各国構 御發途相成候
間其邊を以ハ詰問申上ハヽ国辭柄如何こそ奉
存ハ左ハヽ萬一彼こそ兵端を開ハ共強而彼
方かるて辭柄無之とも難申方今こそ形勢一朝
有事時こそ回顧躊躇海路こそ運漕を絶都下若干
こそ人民忽饑餓こ迫こそ何とも難忍次第各謀こ
国所置こ隔こそ可申候併是迚こそ成行一朝一夕
こそ事とも無之只因循姑息こそ弊此こ至こそ候儀
故當時無備ハ充實各こそ乃譯を以一向こ平

穩ゝ御所置ニ可及と乃御國人ニ御諭方ハ兼
伏仕間敷ハ固怎是迄ゝ御危運是非ニ不及
儀ゝ御決心被為立假令草身裸戰ニも致せ死
戰ゝ外ゝ首之間麦何とも無謀ゝ危策ニハ首
ゝ候得共今般ゝ御一拳ニ御國地掠奪ニ致ハ
程ゝ儀ニも至申間敷ゝ存ハ得共環海ゝ御國
柄後拳各國合從して相迫ハハ何拒ニも御座
中ゝ御大事必防禦彩屈兼可申不援ニ至り所
謂百万ゝ償ニも可相成其段今般ゝ一拳より
後来破滅ゝ本ニ相成怎入ハ得共時勢不得止

一回身命を抛テ御國内ゝ人種尽果ハ迄ゝ外
夷ゝ俱雑居不仕ゝ申儀を當ゝと以為しハか
ニ見込ゝ唯ゝ御上洛以前も怎怎申上ハ通
軍艦渡来ニ付而ゝ一應彼ノ存念御多取ゝ上
ニ而動静次第
御發達御治定ゝハ而ゝ御不都合相生可申
軍艦渡来後ニ至り御発達日限等御探上是
迄御取扱相成候御先中方ハ御不在ゝ相成萬
一彼方 還御迄碇泊不仕兵庫大坂港ゝ内へ
相廻り可申欲其節京師より外國ゝ御所置ゝ

御職掌當節ゝ変右と差置れ急速に出発遂相
成候ゝ何故こゝに哉ゝゝに難問有之ゝ節ハ何
を以御答江為進ゝ哉只々外國ゝ願意と御辞柄
無之速出ゝとゝ御打捨置 御發途相成候松
こ相當ゝ誠こ以恐入ゝ段ゝ恵而申上置候
得共既往ゝ儀ハ暫差置方今ゝ出所取置前文ゝ
外私共可申上儀無御座ゝ此段申上候以

上

松平對馬守
酒井但馬守

海舟書屋

京極能登守
長井五右衛門
土屋民部
川村順一郎

文久三癸年四月四日諏訪因幡ゝ目付ゝ相渡候
書付

阿部播磨守
酒井繁之亟
大久保加賀守

松平右京亮

相馬大膳亮

慕而被　仰出ゝ通英國軍艦渡来ニ付不容易
折柄市中其外共動揺ニ来ゝ悪徒共徘徊ニ致
乱妨も難計依之甚方共ニ為取締被　仰付ハ
間鉛々人數差出ゝ盈夜不限御府内見廻狼藉
者見懸次第無会用捨召捕時宜ニ寄打果ハ而も
不苦委細ゝ儀ハ町奉行ニ可被談候
右ゝ通鉛々ハ相達候間可被得其意ハ

海舟書屋

同年英國軍艦申立ゝ儀ニ付薩摩ゟ申立書
今般英國軍艦渡来以書翰歎願ゝ儀申上候趣
御理大丈致兼知ハ右ハ去秋於東海道生麦縄
手一門嶋津三郎家来英人会礼ゝ所業有之候
ニ付難捨置及殺害ハ儀英人心外ゝ旨ニ而三郎
一類ゝ首級を刎其上多分ゝ金子を申受度段
申所置於会之ゝ兵端を開可申旨申立ハ由對
公儀修理大丈ニ於て深く奉恐入候依ゝ三郎儀
取鎮法立ハ越申渡至ハ然ル處三郎儀申出ハニ
ゝ英人仰望我等首級と相渡　公邊ゝ御安鎮こも

相成儀ニ候ハヽ早速出府仕英人ニ云合戦事ニ上
首級為取ヤ度此度ニ儀國家ニ重事ニハ同享
出評議ニ成下置御差図ニ応ニ致し度右ニ
候於國許被ヤ付ハニ付申上候以上

松平修理大夫内
鴻津將監
二階堂 鄰

同年五月英國ニ償金相渡ハ儀神奈川奉行より
市中ニ達

海舟書屋

英國軍艦一條ニ付兼而於 御上更々御用意
被遊ハ変今九日九ツ時英國ニ洋金ハ渡り相
成万々事柄行屈然上ニ軍艦等差向候儀無之
交易ニ成も是迄ニ通ハ差免被遊ハ趣右ニ付
而ニ下々ニ者共安心致仕入等も十分ニ致し
家業可致ニ旨被 仰出ハ間此段相達候

五月九日

同年六月廿八日英國乃軍艦鹿児島ニ入生麦の償
金と求む其應答の大略如左

英船に相渡し書翰

來翰を以相達す生麥一條に付申立候事件往
復に而も辨知いたしかたき儀有之に付明廿
九日午刻他國人應接公館にかゝて事理明白
に應接ふ及度に付水師提督其餘重役に面々
上陸あらん事を乞ふ
一貴國各船に番船二隻宛附添置に付薪水其餘
自合に品希望ふ仕せ差送る屆きに付是我國
法ふして其方へ便宜ふ乃禮節ふ
一前條不便ふらさるに用ふ備へ候間端舟等に
上陸一切無用たる屆く若無法に上陸ふ
於而も我國人強壯如何ふ致失礼ふ及も難計
候に付前廣業内ふ置所ふ
一書翰両囊　請取

但英國ニストル

亥六月廿八日　薩州政府

英國士官

殺害せし者を捕取し死罪ふ處ふへき等に儀
左に事に而人命に貴きハふし故ふ直に收

海舟書屋

獲し相當に罪ふ處をへし然も其足下の知る
通り日本國中延來を諸侯の意互ふ齟齬し或
ハ是迄秘し置者もある證據こと昨年來より
頻りふ探索をれ其ふ海に捕獲せし且人數も
一人りあらはして種々乃逃避の術を尽をと見
屋たる國より江戸と京都と親睦のた免ふ往來
をふ事ふて主意毛頭ふ事を ハ主人より命し
たる乃疑ひを ふう ふ屋し殊ふ國法を犯し亡
命をる者を死刑の罪あるふ故り若探索吟味
乃上死ふ至をへき時を長崎横濱等に滞在乃

軍艦ふ此事を達し支々見分を受屋し若此事
ふ付て時日乃猶豫ふ事れを止事と得を以前
より罪ちる者を其罪人と偽り足下等乃眼前
ふて刎頸せを足下等其面貌を見知りふ犯う
故ふ実の罪人と異ふ屋ふれとも彼の如く足下
等を欺くを国より其志ふあらは
一日本政府に事ハ專ら江戸政府ふ從ふ屋を事国
より足下に加ふる事ふして諸侯を其指揮り從
ふて進退を受るより然ふ多年来條約を交
換せし事もある由ふもとも其條約中ふ諸侯往

来る時々假令幾里數往還し途而已乃免許あ
るとも以へとも其往來を始けても直と以ふこと
を為ふ海しきるり譬若し足下乃國ふてもあ
る我國の法乃如く數多の從者と從へく往來
ち時々慕て制禁あるふも拘らに之を犯を
ハ衝倒ちう又打と欲せさるハ其國主乃往來
もるりかくかる屈し勿論前ふ云通り人を殺
せる罪を大るるう故り之を殺すへき事を足
下も同意るり故ふ此事を兼引るふへし借諸
侯を指揮せふ江戸乃政府ふて從來事を國法

海舟書屋

乃事を條約ふ載せにして穏りふ諸侯の過と
為を政府の不行屈るるへし政府乃罪欲又
大守の罪を如何判断あるを亀ら欲此事ふ就て
重大乃事件と付江戸政府の重職と我國乃
重職と立寄ると足下ふ論判せさるハ此事乃
て片論るを可かたし
一妻子養料く事ハ其後相定
一幕府うり貴國乃軍艦我國ふ渡来の後既ふ蒸
氣船を以て我ふ令せしと以ふ後ハ曾てるを犯
事るり右板の虚言を我を誇を所以と思をる

若其言伐証せんとふらハ閣老の書翰も少ハ
屈きふや見せ張へ此等の事ふて大ふ反覆乃
事多しと思ハふ何とも不審ふ存そ既事ふ至
足下ふ於て急決して不審ふる事ふき哉
一我政府ふくくそ江戸の政府乃命ふ従ふと切ふ
ま八何事も江戸乃命ふ従ひ委置を屈し右来
翰の趣ふ基き事実の情態を以即誠實の意を
示そ

執政

川上但馬

文久三年癸亥六月

海舟書屋

大英國ジャルナタヘール兼コンシュルゼネラル
インシトジョンニール之足下ニ報そ
然ふに此談判諧ハ不ニして七月二日遂ふ爭戰乃
事ふり其屈書云
去ル六月廿八日英船七艘城下海へ渡来生麥一條
ニ付
公邊ニ御屈申上且業内船迄も被差遣趣ニ而種
々申出ル間是非曲直為分解来應接不首尾中
去ル二日手船薫氣船三艘引出既ニ出帆ス形

ふ見受候ニ付安接砲發為致翌三日迄及掃攘
即日城下許出帆十里斗り之處ニ七艘之内壹艘砲
泊外六艘致出帆候全体攘夷之期限も相過候
事ニハ得共弥決議未タ不致兼知ニ付此節
迫之應接之上曲直を正し可申若之處彼より
非法之働致しハニ付安接前條之形行ニ相及
候安細を長濟奉行へ相達ハ此段早々及沸風
いたし上

七月四日

松平修理大夫

海舟書屋

左ふ記を伺處を前文戦爭の梗槩と見るふ
足を八七月八日乃横濱新聞より抄出ス
英國軍艦コロモラント書狀を以て當港ニ着
せり右船鹿児島ふ於英國軍艦ふ遇ひ次乃
新聞を少爭り
第八月十五日七月二日第十二時軍艦鹿児島の港ふ
泊しありて大風吹く日本人不意ふ發砲せを不
幸ふして次の人々死したり
甲比丹ジョンスリング　コンマントル、ウイルモット
右両人一ツたふて打殺さるを負六拾人巨細ふ記

事を滑に其大畧を載せ

當十五日十二時其臺場より打出し弾丸を水師提督直に合図をなし日本船三艘を焼く皆捨子仕掛蒸氣船なり

右日本船を其朝に解りて軍艦乃側に泊す臺場より打掛たるを以て軍艦砲を揚け臺場五百乃至六百ヤルト離まて一列に連り臺場より打出す事甚強く殊に大筒にして其内に六拾乃至七拾挺を十インチの破裂丸又三十三斤乃至二十四ポンドの實丸あり甲は丹并

海舟書屋

ふコンマントルを午後第二時五分乃頃甲板の上より一丸に當り即死を

又十インチの破裂丸甲板乃中央にて破裂し水夫七人即死し負の者水夫五人ロイテナント壹人なり

天氣悪く雨降て風陸に向て強く吹く午下第三時廿分發砲やむ第九時廿分に造船場并に商家焼る

府造船場に打掛る事終夜

第八月十六日七月三日午後第三時三十分に砲を

揚け蒸氣こ而港口ゟ出船府臺場ゟ向て行く
とも只答ふるものゝ臺場二ヶ所のみゝ有り府
夜中尚燒ゐて有り

一エライリス船　死人拾人　手負廿一人内一人死
二ペール船　死人七人内一人士官
三アルゴス船　手負三人
四コツケツト船　死人壹人　手負六人内一人ロイテナント内一人死
五ヘルシウス船　死人壹人　手負弐人
六ライスホース船　手負弐人
七ワアツク船　無難

海舟書屋

同年十月五日松平修理大夫家来英國公使ゟ

對話書

十月五日九半時調役鵜飼彌一郎徒目付齋藤謹
吾松平修理大夫家来岩下佐次右衛門重野厚
之亟樺山舍人能勢次郎右衛門引連英國公
使館ゟ羅越佐次右衛門厚之亟同國公使并水
師提督ゟ引合ゝ越左ゝ通有之

此方

一此程ゟ両日ゝ應接ニ而大概彼我ゝ事情相

盡し候ニ付今日も決意ス處可申談間被義候
拙致度ハ冗長無益ス談ス一切不致候

此方

一ヶ前共兼而主人ヶ被命ハ趣ス鹿児島戰爭一
條此方過ヲ過ト以為シ其方誤ヲ誤ト以為シ
曲直相決シハ上ニ而所置可致旨被申付候右
ニ付彼我曲直両日辯論ハらひハ要其方ふく
ヲ不直ス儀無之此方ニ而已曲有之旨被申張
議論到底難決ニ付左候ハヽ英國政府ハ罪越
論定可致旨致相談ハ然ル處此方蕪氣船取押

海舟書屋

候儀ヲ元々本國政府ヶ命令有之趣ふく
右書翰も被差示ハニ付其儀ヲ相止可申段談
合ハ要償金若出候得ヲ罪人ス儀ヲ先ッ延引
致呉ハ隈被申聞ハ間其通所置以為シ置候得
共最初主人ヶ命ハ彼我ス曲直ヲ辨シ所
置可致トの命令ヤヲ所置筋相違以為シ候間
右ヲ決断以ス候程ス權ヲ無之ニ付一應國
元ハ罪越右ヲ趣委細主人ハ申遣候上ニ而要
置致度ハ故日延ス儀申談ハ事ニ有之然ル處
日延ス儀ヲ兼引無ス右ニ而ヲ事実國許ハ申

遣し主命を奉し所置可致場合無之此度之而
速決かたひい滑を國權を犯し速決不致候滑
と懇親熟談不相整寂早主人より被命懇親と取
扱可致との趣意ふ肖き両端と向左條減場合
別と致方無之間暫く両人共條時と取計と而
國權を假ず決言可致積りを而候其儀も互に懇
親を取結い為と有之夫と有而も此方より望
と候儀二事件有之第一事件を其方軍艦一艘
賣渡呉り相致し度軍艦賣い儀を西洋風習ふ
て從来出来致兼い儀も兼而兼知致し居い然

海舟書屋

ふ成懇望以ゐし候儀を前方と而も國權を假
ず非常と取扱以たし候間其方ふても非常と取
計以ゐし被呉い相致度左い滑を主人より命令
ふ外ない取計方いたし候申譯ふも相成且懇親
と意を被盡い廣的然相顯を又英國と鹿児島と
向後戰爭無之證ふも相成可申左相當と價美出
候事こい間此儀周旋方頼度い第二件を先頃鹿
兒島かゐて戰爭と砌引連らを候を前士官武人
差戻呉い相以ゐし度左候滑を互ふ懇親と意を
表し和親と國に可有之彌以右と廣々兼引致し

被其ハ滑ヶ則約書為取替可申候両國懇親不
取失たゞ如此勘辨相付ヶ候右ニ而兼諸每ニ
上ヶ双方共存寄を盡し候ハヽ外無之否決答
兼ヶ度候

彼方

一伺度儀有之ハ軍艦沙取入被成ハヽ何故ニハ哉

此方

一是迄蒸氣船ヶ有之候滑共軍艦無之國用を欠
き候間懇望致候且懇親ニ意を盡し難爲ニ事
兼引以ゑ〻被其ハ滑ヶ前共假權ふて所置

海舟書屋

致し候申譯ヶふも相成可申と存候日本ふて是
迄て軍艦毎之変英國ヶ買入ハ滑ヶ世間ニ
規模ふも相成候

彼方

一右船ヶ改府ニ為ニ候哉薩州ニ為ニ候哉軍艦沙
買入ハ成度思召ヶ何故ニハ哉何ヶ国ヶ國と戦
爭被成ハ為ニ候哉

此方

一右ヶ薩州ニ為ニ有之不虞ニ軍備ニ以ゑ〻度
尚追々諸國ヶ買入ハ積ニ候滑共先ッ英國

以て多初に買度存候即今右戦爭等之用意
に充候事こと決して無之候
彼方
一一ヶ條心附候儀有之由話し可申を前兼及候
以ゑ日本より亜國和蘭に沙頼以て軍艦打立
候間手前方へ沙頼こと及ひ申間敷存候右沙
誂船到着以たし候ハヽ其上ヶ而何艘沙誂り
相成は而も可然存候軍艦と賣渡候こと兵卒
を賣渡候も同様に儀こ而迚も難出来事以
て候尤軍艦賣渡は儀こ固より不相成事こ候

海舟書屋

濟共不用こと存こと稀以賣拂は事も有之は左去
政府こ取扱こ有之候間許容無之候而こ不相
成事こ有之候薩人両人差返し候拓と乃儀こ
實意以て沙談有之は哉右両人を前共方こ不
嚴立事ハ既こ沙信し可有之候一体此事こ水
師提督心得居立は間談判相讓可申候
水師提督
一右両人こ儀心得居は丈ヶ可申述は決して包藏
以ゑし候儀こ無之先須軍艦取押は加来紐こ
人々上陸為致附屬道具等ハ銘々持退は拓申

含候ニ付右両人上陸いたしいまだ恐き居候度旨
懇望致しいに間甚意ふ應し申其節ニ不存候上
は変船将ゟ右ニ儀申ゟは同両人共提督船
ニ迎へ面會候處希望いたし候ニ付横濱ニ連
越申は船中も寛優を與へ自在ふ為致歓遇致
し候ニ付両人共相悦謝辞等申述横濱ニ上陸は
ゟし何方ニ致来り候

此方

一右両人儀其方軍艦ふて箱館へ差送候とも申
又英國ニ差送り候とも申譯兼ねからひい

海舟書屋

彼方

一箱館ニも英國へも可差送謂ニ固ゟ無之候

此方

一左候ハヽ英館ニ暫被差置其上ふて立退は哉且
何所ニ而上陸はいたしは哉兼り度候

彼方

一軍艦ニ日本ニ船を呼寄乗移ニ上陸致しは由ふて
候

此方

一日本船ニ小形ニ而候哉

彼方

一船ゝ儀ゝ一向不存唯船到着致し候間告別以
無しに旨申聞之退候最初ゝ前方ゝ連越候ゝ
元々両人ゝ頼り旨之此方ゝて強而連越ゝ儀
ゝゝ無之旨ゝ外假令伊談旨之ゝとも更り存
不申候

此方

一両人上陸以たし候ゝ何月何日頃ゝ候哉

彼方

一庭兒島ゝり軍艦當港ゝ帰着以ゝ無し候夜ゝ事

海舟書屋

ゝ而候右ゝて二ヶ條ゝ返答相濟申ゝ

此方

一両人ゝ始末ゝ事實相分り落意致しゝ軍艦ゝ
改府ゝ而ゝ取扱ゝ旨之候ゝ改府ゝ被申立
周旋旨ゝゝ扨致度英國ゝ大國ゝ事ゝも旨ゝ
不用ゝ分一艘計ゝ可旨之事ゝ存ゝ亜國荷蘭
ゝ軍艦詭置ゝ儀ハ改府ゝ而ゝ如何旨之候哉
不存當方ゝゝ更ゝ右様ゝ儀無之候

彼方

一各國ゝ被對戰爭ゝ沙汰ゝ無之ゝ得ゝ前共

英國政府ハ申立一艘ゝ處就十艘ニ而も御周
旋出来可申候

同

一英國并條約取結候各國と平穏ゝ交際ニ相成
居候折柄ニ候得ハ右ゝ御周旋可致候得共政
府ゟ先頃鎖港ゝ儀被仰出此後各國とも一
戦ハも可及景況ニ相成居候間此周旋致兼候
一仲ゝ前共存意ニ而ハ右ゝ次第ニ不相成和
親永續ゝ所希望致しゝ事ニ有之候

此方

海舟書屋

一何ゝ之ハも和親ゝ事ニ可相成被存候間是非と
も右周旋方受合呉ゝ様致度ゝ

彼方

一手前周旋不致ゝ而も歐羅巴ハ在帰望ゝも乃
ハ御托ゝ相成候ハゝ可然軍艦打立候儀も商
船打立候儀も同様ゝ事ニ而候

此方

一被申聞ゝ通ゝ誂候得ゝ何方ニ而も相辯可申ゝ
得共軍艦賣渡ゝ儀相望ゝ趣意ゝ英ゝ軍艦
買請懇親ゝ意を表ゝ度存意ニ而ゝ其譯ゝ償

金差出し候儀其權每之愛假權く罪を犯し候
儀に付其方に而も夫丈ケく處被心得兼允首
之い旨致度候

彼方

一其方らり懇親く意を盡を迄い證を被示候と
ハ船を勿論何成共沙周旋可申事に而候

此方

一右を周旋以ゑし呉い趣左はいく打立方周旋致
し呉い哉持合く分賣渡し呉候哉

彼方

一右を新規打立候とも持合く内手離せ候て賣
渡可申左政府く命に無之候而を不相成候先
須香港ふて軍艦入れに而賣拂い事も首之隨
分容易に出来以ゑし候

此方

一彌以懇親く意を表し右く儀聚と引受周旋致
し呉い旨致度右を罪人證書并扶助金差渡候
儀く其權每之處法罪を犯し両人ふて所置以
ゑしい事に付主人に右申拔く為懇望致し候
事に首之い間何分にも相頼度い

海舟書屋

彼方

一軍艦ニ大小何程位ホて候哉大砲百六十門相備いも者之又ハ大砲一門相備いも者之候

此方

一先頃鹿兒島ニ系いエラーリス船位ニ恰好ヲ以て一度候大砲据付附屬器械取揃ニ價何程位ニ而い哉

彼方

一凡二十万トルラル位ホて可有之候

此方

海舟書屋

一何卒右ニ変を周旋相頼度其内入札賣拂舩有之候ハヽ大小ニ拘ラス早々買入度い

彼方

一船を活世話中いを即ち懇親を盡しい證ニ相成候

此方

一左候ハヽ大概以ハ頃近ニ調ひ可申哉

彼方

一何ニ政府ニ不申遣い半而ハ不相成現小賣拂候船有之い哉又ハ新規ニ打立候哉計ニかた

く候

此方

一打立方大凡何ヶ月程相掛り可申哉

彼方

一唯今と所こ而こ何分打立方月数こ難差定五ヶ月も相立は滑こ右こ成申遣は返事も来り價も相分り可申候

此方

一大概見積りこ月数可有之は

彼方

海舟書屋

一新規打立候こ日本こ而塗庫製造は同拍ふて材木を枯し置不申は半而こ不相成候早急こと出来不申左事こ寄八ヶ月或ハ十二ヶ月位ふて出来候事も有之候

此方

一上海香港こ入札賣拂船度々有之は哉

彼方

一稀こ事こ而候

同

一一体支那と戦爭以ゑし候滑共和平こ相成

候後を同國ゟアゲントを英國ゟ差越軍艦
打立ゝ儀相頼ゝ事も首之一ヶ年前凡十二艘出
來申候且英乃士官航海運用ゝ為め支那ゟ頼
ゝ付借遣し置候

此方

一支那人航海ゝ操練出來申候哉日本人も航海
操練を如何以為し候ハヽ西洋通り出來可申
哉

彼方

一矢張最初を英ゝ士官或ゝマトロス抔爲來組

海舟書屋

修行以たし候外有之間敷ゝ日本人ゝ支那人
ゟを速ゝ出來可申候

此方

一少年ゟ修行不致ゝ而を成業相成間敷哉敷
師相頼ゝ儀を出來申間敷哉

彼方

一容易ゝ出來申候

此方

一軍艦并教師迚も世話以為し呉ゝ儀も懇親を
被表ゝ為め引受候との一札差出呉ゝ様致し

度左に渉て右一札主人に相見せ勘定懇親乃
意を被押盡に證據といたし度候
彼方
一其通至認可申書中懇親之處置有之候ニ付而
と申事認入可申候
此方
一右ハ て直數に
彼方
一行違ひ有之に而ハ不直候間ハ前取扱に委と
書認に處と一應法語し可申候ハハ前方より

海舟書屋

扶助金并罪人證書法渡相成和談懇親ニ取扱
相成候ニ付而ハ政府乃取扱を以軍艦買入方
教師雇方周旋可致との文意ニ認め可申候
水師提督
一横濱立留中軍艦沙一覧被成ハ拙ハ為し度い
此方
一手前方ニ而も相望ミ候處ニ而候
彼方
一政府ニ而取扱買入方等法周旋申ハて以後戦
爭決而無之と見据ふて取扱ハ事ニ候

此方

一其一條ハ不容易儀ニ付證書被相認ハ拙ハ必ス

ト度候

彼方

一右ハ懇親ノ意ヲ以テ取扱被成ハニ付如斯致

シ候ト申儀認メ可申ハ

此方

一扶助金ノ儀モ差向手前ニ無之候間

公儀ヘ拜借相願ハ上ニ而相渡ハ積ニ而候得

トモ萬一拜借不相成節ハ國許ヨリ反寄可申

海舟書屋

右去大金ノ儀ニ付一時ニハ難百寄何ハ小モ

當年中ニハ皆濟相成ハ拙可致候左右證書ハ

儀ハ直拙差渡置可申候

彼方

一金子ハ渡方ノ儀ハ如何拙ニ而モ宜敷ト存申

度々ニ渡渡相成ハ而ハ快ク無之政府ヨリモ

右員數ヲ四倍程ノ處一時ニハ差渡相成候

且ハ國ノ金子ハ既ニ相廻リ居ハ哉ニモ兼リ

及ヒ候

此方

一素ゟ當方ニ右拵ゝ大金ヲ持合ヒ無之候
公邊ニ相願ハヽ多分出来可申ヲ存ル且改
府ヲ總額一時ニ決差遣有之候段左も可有之
候得共當方ヲ迚も比較ニ不相成只今金子無
之儀ヲ實説ニ有之候
彼方
一政府ニ而も金子決渡シ方ニ付而ヲ種々沙談
ふて甚面倒ゝ儀有之候右同拵ゝ儀無之拵致
し度ル
此方

一當方ニ而ヲ決して右拵ゝ儀ヲ無之候
彼方
一金子決渡方當年中ニ而ヲ何分兼允難致候横
濱商人ニ決頼相成ル而も速ニ調達出來可申
と存候
此方
一當方ニ而ヲ右拵ゝ大金速ニ出来以ての儀候儀
難相成ル
彼方
一今日ヲ彌以事件決經ゝ被成ル決約束ふて沙

出被成候間聽と取極申度候

此方

一急度相渡し可申候得共素々無之ものと何と
も以ふし方無之候

彼方

一政府こ而も時限相立渉渡こ相成候渉談判も
有之い得共詰り一度こ渉渡相策い

此方

一迚も左様こ相成不申い甚為證書差出い儀ふ
而候

海舟書屋

彼方

一政府こ而も證書差遣し相成い得共兎角相
違有之い方を已り相濟候間比例致し申立候
こを無之い得共丁度政府こ渉談判と同様り
付渉談し申候商人より法借受被成いつ〳〵可然い

此方

一薩砂支配下こ商人こ有之候得を出来可申候
得共當所こ而を中々以出来難仕候

彼方

一明後日本國江飛脚船出帆以ふしいこ付其節

過日より拙談判首之事濟し趣申遣し度間金
子も丈延之拙渡し被下度候

此方

一大金之儀こも首之い間延も丈延之差支しい儀
も難相成候

彼方

一政府と薩州とも格別拙懇親と申事こ付金子
拙借用出来可申儀と存い

此方

一丈故相願い儀こ首之候得共丈々拙多数も首

海舟書屋

之間老方より
大君に申上丈る拙役々しを歴不申候而も
不相成候間今日相願明日相濟い儀こも至り
兼候

彼方

一拙借用出来候も義日頃こ而相分り可申哉

此方

一明日帰府明後日相願可申い間大概し拙模様
両三日中ふも可申越候

彼方

一沙帰府之上ハ無之ハ而之ハ調達不相成と申
儀と事情無餘儀こ存右こ而宜敷ハ何之ふも
四五日之内ふと又候當所ハ出相成可申其
節之必右金子ハ持参可被成ハ額之出来不申
鹿児島迄被申遣ハ成ハ相果候淀之矢張以
前之姿と同様ふて談判纏り不申ハ
此方
一當地ハ糸りハ節々必持糸可致候
彼方
一左候ハヽ四五日之處と如何様ふても宜敷候間
必ハ持糸可被成候
此方
一必持参可致候間軍艦周旋之請書ハ其節迄ふ
認め置候様ふ致度候
彼方
一是迄之ハ談判政府之役人之合ハ事故金子ハ
渡しと節も同様右之人々之合可被申と存候
其砌罪人捕押罰し方之儀證書相認之合役人
調印有之候様ふ致度尤ハ前方より差出ハ
證書ハも調印有之ハ様ふ致度候

海舟書屋

此方

一兼知以たし候右證書罪人捕押罰し方ゝ儀精々吟味所置可及ふ入候上ゝ速ふ相當ゝ罪ゝ可致と乃文意ゝ認め可然哉

彼方

一殺害人探索罰し方ゝ儀ゝ精々意りかく致し且此事ゝ必為ゝ屈しとの意ふて亘敷候一体直相ゝ捕法罰ゝ成ゝ儀ゝ相成難き哉ゝ候得共法ゝ捕法罰し相成候得ゝ彌以ゝ懇親乃廣相願申候

海舟書屋

此方

一兼知以たし候後日出張ゝ節ゝ軍艦一見致し度候

彼方

一證書ゝ載通とも差出可申英蘭文ふて亘敷候哉和文相添可申ゝ哉

此方

一英蘭文而已ゝ而亘敷ゝ

彼方

一左候ハヽ右ゝ而事決着者之候

此方

一左様ニ而候

一多前拝其内軍艦打立方相成候ハヽ歐羅巴ハ
羅越三ヶ年も滞留ニ上航海學科究窮ハ為し
度尤廿年三十輩程も相携習練修行為致度其
節ニ彼世話ニ相成可申と存ハ

彼方

一先頃御國政府より被差遣候使節ニ御期限も
有之候故十分各國ニ風習等ハ盡し申成候間
合衆之三ヶ年も御滞留被成ハ深ク學術を勿

海舟書屋

論風俗治体等も御究悉可相成と存候

此方

一左様ハ為し度候

右ニ而會釋有之退席

御殿山外國館ニ変

第五号

千八百六十三年第一月十九日横濱ハて

外國事務宰相台下ハ呈ス

御殿山乃門ふ在る日本番人一名或ハ其餘殺
害せらるしとの便を此地ふて浮而して後諸
使臣館ふ之を告知らしたり
御殿山の不列顛使臣館まて成就せる又人い海
ふ居住せしと雖も其地ふ人殺しの事し事態
を自然大切ふ為を以余其委曲を知らんと欲
を奉行を余ふ之を審ふ知らさるしか故ふ
至
是故ふ殺さるたる人数兇徒の員数と位階及
ひ殺害を互乃喧嘩口論ふ由至又ハ異國公使

海舟書屋

ふ關係せる趣意ふ原くふもせよ此悪業を為
せし所以の道理を余ふ告知し給ふらんと我
台下ふ請ふ恐惶敬白

不列顛女王殿下のチャルゼタツ(ール
エドウシンジョンニール 手記

日本在留書記官
ル、エウスデン 譯

貌利太泥亜

イシントシヨンニールロ

貴國第一月十九日附第五号ゝ書翰落手品川
臺普請場ゝ門を守ふも乃等殺害せらるゝ儀
ニ付委細ゝ趣兼知ロ致度旨被申越令兼知候
即其節取調かゝひし趣別紙訴書三通寫差進
候間彼是参考ありて事情了解旨之度ロ拜
具謹言

品川臺普請場詰役人ゝ訴書寫

海舟書屋

沙用屋敷脇假番人両人ゝ内壹人便所ロ罷越
候内番所ニ殘居候作助と以ふも乃右ゝ脇并
咽喉ロ五六寸程切付打倒居候ニ付早速醫師
呼寄療養為致ロ変厳早絶脉と相成ロ右ゝ全
猿茶屋傳藏申立ロ惣髪ゝもの不業ニも候哉
其節ゝ事情見屈候もの為之ロ

品川臺茶屋傳藏口上書寫

十一月廿七日益九ツ時頃侍弊ゝ者壹人惣髪壹
人坊主壹人小者壹人召連傳藏見世先ロ罷越
此屋敷内ロ外国人引移ロ哉否兼知以ゝ度ゝ

旨右侍醉し者申聞いこ付以まゝ引移不申候
趣相答い委偽ヤ少候節ゝ此一刀ニ而切捨可
申暫く畜類を切不申い間如斯錯付いとて長
き刀を抜き放し此後外國人引移いゝ心注
進いたし可申其節ゝ為麗災金百両為取可申
抔ヤ少候ニ付屋敷姓名等兼り候委難名乗旨
申聞近日又い兼りこ可罷越抔ヤ少候内惣髪
し者暫時不相見無程立戻り連し者を手招致
し何ゝ咤連立二本樓し方ハ急き通過候ニ付
其段沙用屋敷ハ注進以ゑし可申積りこ而假

海舟書屋

番所ハ罷越い委作助手疵負打倒居候ニ付
若哉只今し者共ニ而ゝ無之哉と存し二本
樓し方見送り候委寂早人影不相見候

屯所門番人ゟ差出候書付寫

今四ツ半時頃何者とも不知侍醉し者拾人計
門前ニ罷越内五人無案内門内ハ這入候ニ付
何方ハ通ハ哉し段相尋い委異人屋敷見物
し由申候ニ付普請中諸役人諸職人し外一切
出入相成不ヤ段申聞い處殊し外立腹以ゑし
然し役人共面會し上是非ゝ見物可致此方

芸儀も近々帰國致し候故國元に土産咄と可
致抔申罵り候得共不取合申宿め差戻に変同
日九ツ時頃又候何者共不知侍拵し者七八人
門外にイミ内壹人門内に這入壹人も坊主も
人も惣髪壹人も半髪にして何れも伊賀袴を着
し草鞋をき坊主し方紋所落ふて丸に一し字
陣笠を携熟酔し体にして異人屋敷見物に居越
候由荒々変中に付姓名相尋ね處天子沙家来
にして其方如きもの共ふ被妨ね筋を無之抔種
々悪口を盡し刀を按撫ね体に相見へ候得共

海舟書屋

不取合色々取宿め差戻候事

十一月廿七日

是より先立横濱ヂクソン氏より左乃書翰を
贈りて忠告する事あり云
千八百六十二年第五月十一日横濱ふて
我益友爺次郎に
足下今日御殿山及ひ彼地公使館造営乃事を
余に談話せり
余其事に就て話せし處を今辯解せんと為文

通ス

余横濱の日本人ニ話を聞たる所ニ由て考へ見るニ所殿山乃遊山場を取上けて之を外國人ニ與へたるを彼等愁歎せる也

右ニ依て考ふるに日本人を大切ニ取扱ふと彼地外國人のニ先ふも日本政府乃為ニも甚良とス○余又甲州信州常物人の憤怒ニ堪て屢日本の人心不折合を引起したるを知る

抑此所殿山を家光公江戸人の遊山乃ニ先ニ

とて賜ハリしニ依ニ此山を外國人ニ與

海舟書屋

へ張ふと江戸人等如何思ひ取ふらんや余又諸大名乃内或大名一同外國ニ ニストル等ニ對して甚憤怒し及ひ此事ニ伊光中の大憂苦と引起したるを知ル

扨江戸人乃外國ニ ニストルを悪むと諸大名ニ ニも甚しきと先右の譯ニ始りしを為

浮光中ニ日本使節乃ニ先英吉利政府ニ へ

イデパルク（ロントン府内の乃遊山場）を取上んと請ひ或先佛蘭西政府ニ トイレリース（パレイス府内の王の遊山場）と取上んと請ひ張ふ乃ハ右両政府其請ふ應ス ニ ふらん

や必應し得さるあり但此へイデパルクセト
イレリース等江戸人乃た先ふせる所殿山と
同様の場所也是ふ依て余まゝ考ふふ日本政
府より江戸人等此山を與ふる様欲せしと談
せさるを得ス且此事ふ就き外國ミニストル
等の述る事を配意し強ふ理からしに如何とる
ま〻若日本政府余う考の如く為し強ふ事も
外國人等何事をも為し得ス又言ひ得に且
是ハ却て日本政府を益強盛ふ為ス事ならん
若日本ふ住居して日本乃法律ふ屬せさるを

海舟書屋

外國人ふ右の場所を許ス時等日本政府の衰
弱を起ス事ならんとを知る故ふ余特り右乃如
く述るあり即支那ふ各本國の法律及ひコン
シエルふ屬スるを外國人を住居せし先て那の
如く衰弱ふ至るしも上の如き事ふ由ふるり
且支那等一二人罪人を罰スるふ威權ふし
余思ふふ外國の商人を江戸ふ住居せしめて
中川尻乃如き場所へ彼をミニストル等と共
ふ居しめハ最良策とるりたるふらん○今ミ
ニストル等江戸ふ住居せり而して彼等何事

を為さや絶てかゝる者なし余殊ふ此乃如き
ニストル壹人ふ過ぎと思へ是然も共清安中
乃考ハ余と相違せり及ひニストル等を成
ふへく各古高人と別もて住居さふを好めり
清光中の大衰弱とるふ事ハ條約中ふ外國人
を彼本國法律ふ屬從して日本ふ住居し得ふ
と約許せし事ふり
既ふ此條約と結へり而して數年を経さも各
改革し得さ
今事と日本の為ふ計ふふ英吉利等乃國ふ住

海舟書屋

居さへき日本人の為め右と同様乃約許を得
んと英吉利佛蘭西亜米利加魯西亞へ使さ遣
し若英吉利或ハ佛蘭西或ハ魯西亞之を日本
に許さ時ハ他之を他乃各國へも許さふ
を得さ但彼等之を許さを欲せされハ是ふ於
て此條約を改革し得遣し然もとも日本を強盗
ふふさんと所置さふふさ大君萬民を心服せ
しむ遣し
家康公ハ其所置ふ於て甚鋭敏の君ふり而し
て多くハ法制と設けく此國と盡く太平ふ致

せるも然れとも今時勢一新して大君政府外國乃如く船艦煩砲人物と十全完備なる乃機會来りし故此資費ハ適当なる程の諸種賦税を取立ル

英吉利政府毎年弐億トルラルを費し事務毎日本ハ甚多端なり而して日本ハ英吉利ハ較なるハ尚富饒乃國なり

若日本英吉利人の如く棉布を織出さんため蒸氣機関を建造せしなら毎日本の棉布東洋諸國ハ充満なるならん余日本を種々ハ

海舟書屋

注目して愛慕し及ひ余ハ今日話せし要乃意を足下會得せさるならんと思ふ故ニ書き送るなり是足下の身ハ昇進と幸榮を祈るハ

足下の益友なる

ウオル、ヂクソン　手記

各國公使ハ被仰諭方様ハ一同内評仕候

要旨政府と實々浄條約通和親ハ交際を幾久

変に遂被遊度段と勿論こ候處鎖國し舊習ふ
固着以為し候もの不少政府に被申立候而も
其身し念慮ハ難達事と存迷一途こ外夷を攘
度心伸り父祖累代し家名を捨妻子こも分
ち追々京師に歎訴いらひしもの不少終こと
達
歟聞右等に先入と相成候哉ふて於政府と外
國人交際し儀こ御懸念に及巨細し事情可被
仰上に先差向御後見中納言殿に上京来早春
御上洛も被遊い儀こ付外國人取扱方等

海舟書屋

公武御一体し情趣意被為整　御上洛濟
帰御迫し変右し心得を以諸般穏こ所置可致
就而ハ品川臺公使館造營し儀も
帰御し上改而被及御沙汰候迄々見合可申其
故を同所し儀往古々御殿に有之菜園も有之
公方様度々被為成御殿山を唱其後に國し人
民貴賤とかく四時遊宴し地ふに差許二百年
來背散し場所こハ変外國人居留し地と相成
候儀をかゝるも乃迫相歎き其歎きし基をる
處り終ふ憤怒を生し人心不穏右を其節乃

事務宰相取計を不盡儀に而夫々沙汰し品
も有之候程に儀に付方今引移等有之候ハ
変事出来致間敷と奉難申既に英館造営出来
致し外廻り建等取拂華麗し拓子及見浪人解
らも乃数人同所を一見以為し度由番兵に者
に申聞居之候ハ直に殺害かゝい逃去に儀
に而右体人心に不折合儀を押て取計不容
易変事等出来以為しに而も於政府前書に通
事を被盡候厚意も摸通さ敷振威行外國人交
際に儀耳小無之御國騒乱に場をも開可申哉

海舟書屋

左候而も和親に所詮も無之筋に付右等勘辨
可致旨御説諭有之候方に可有之哉尤前文に
通被仰諭にとも公使等都府に差置候儀に
沽條約も有之品川臺公使館人心小障方今沽
開難に成ハハ代地御取極に下候歟又も造
営も元出來以為しに付不法もろに御懸念
有之ハハ彼國政府より護衛もの数百人
咬寧御國政府に沽厄介にと不相懸直に引移
可申旨或に諸侯に内外國人交際を相拒に者
有之ハハ政府に沽條約を藏に筋小付速了

に誅伐有之其品に寄彼國政府より人数等差
出さるべく若又於京都に條約面に越
思召に不應次第も有之候へ、再び條約為取
結各國とも京師に罷出可申旨品々苦情可申
立哉に候得共畢竟人心不折合に基本ハ開港
以来次第に物價騰貴いたし　御祖宗に御定
被遊し鎖國を循守し右を変ずる故に滅亡而
且又不伏者を誅伐ゆゑ互に死亡し者夥敷
人心あるべき不好事に付右等に害ず不
相成様品々御配慮も有之ハ儀に而勿論於政

海舟書屋

府も元来に御條約面を以和親に交際永世不
朽に被遊度に越意より中納言殿に上京猶
御上洛等も被其基本に判辨に上に越意通
被行ハ事に付更迫に處前書に仰諭に越事相
心得政府に任せ置可申旨に説諭有之候方可
然最不容易事件に付各國公使并公使不在に
かてコンシエルをも一同に御呼寄被仰諭候方
と奉存ハ以上

戌十一月

村垣淡路守

竹本隼人正

一色山城守
菊地伊豫守
井上信濃守
阿部越前守
齋藤摂津守
小笠原甲斐守

十二月十三日の夜品川御殿山ふ建築せし外國公使館ゝ内英國館ゝ已ふ落成し作事方ゝ而

海舟書屋

番人附置しゝ出火して悉く灰燼とゝ成佛國館ゝまゝ取建中ゝふりしゝ是ハ殘まり但一時ふ出火せし伴火藥の發したゝ音も響きていかふも烈敷燃出素より空館ふて火氣も立き處也弾ふ火發したゝふ付番し者駈付たゝ頃柵ふて砲声四五發響き六七人も人形見へ英館の側ふヤーケル砲一挺鋸一挺下駄片足遊女ゝ文も落しゝあるもしと云　水野痴雲筆記

内評仕候趣申上候書付

外國立合役々

外國奉行

一此程行幸甲斐ヨリ亜英佛三公使ハ御殿山
云々儀引會被仰付ハ変亜公使ヨリ改府御
都合を相量り替地ヶ儀相願既ニ書翰を以申
出候儀ニ有之佛公使ヨリ右場所敢而意と致
しハも無之由申立候處英公使ヨリ何分決断
ヶ權妄ハ疑近々アールコツク再渡ヶ上談判
有之度旨申聞差向造營ヶ所を引居候儀も更
小取經ヲ煩ハニ付此上今一應ヶ御説得方勘

海舟書屋

辨仕可申上旨被仰渡奉得其意居候處昨十三
日曉御殿山英幸館怪火ニ而焼失仕候ニ付尚
合考勘弁仕可申上旨ハ仰渡熟慮勘弁仕ハ変
甲斐ヲ出張ニ而説諭方相屆不申上ヶ各國公
使一統ハ招請有之ハ前段方ヶ罵ヶ對
詰ヶ方彼ヶ乃徹底も宜條理於而至當ヶ奉
存候將共當今ハ不都合ヶ筋も ハ為立無ハ據
儀ニも ハ疑ハハヽ御軍艦ニ而參改方ヶ内出
張英公使ヶ引合被仰付此程甲斐ヲ云々申
入候次第ヶ変既ニ不慮ヶ放火も有之此姿ニ

而押て造營致し候とも迚も無事ニ謂ま無之
候間政府ニ於損失ニ莫大申迚も無ニ候將共
夫是人心居合方ニ於所置相整い迚ニ造營見
合居い相致度尤申立い迚も有之候ニ付追而
アールコツク再渡ニ節尚談判ニ遂け可申候
將共差向夫迚ニ諸職ニ多ク引居り不申候
而モ人心折合方ニ於所置ニも差障所不都合
を極い間敷ニ懇親ニ廣を以相考へ兼引致し
可申旨ニ然弁解有之いハ、高貴ニ身分ニ而
出張等ニ對し兼諾可仕哉且又右參政方

海舟書屋

出張ニ儀モ此度於内下野ニ初護送ニ多先渡
來致し候コモトールニ謝詞申述い儀を名義
ニ而罷越い方可然哉一体先年亜國ニ護送船
小相做ひい將ハ御手前扶方ニ於宅ニコモドー
ル等ニ招請ニ下物も有之候儀ニ於疑い將共
此節柄右様ニ儀も難ニ遊哉奉存い間幸前條
法用相兼參政方ニ内出張被仰付候方可然哉
奉存候
一亜國公使横濱ニ退去ニ儀萬ニ勘考仕候変本
覺寺ニ引取居い而モ往還端ニ而神奈川奉行

支配向如何拙警衛仕居いとも却而善福寺ふ
相芳りい儀こ首を尤品こ寄貸借料ゑ下候ハ
を横濱内商人ゝ家屋こ建立可申哉こ御座候
併共プライン申立い各國ゝ哉へ等り至り
候而を必ゝ不都合こ有之ゝ間右を相厭ひ同
人儀同所こ所用有之罷越居い姿こ仕ゝ置
い拙申談右等ゝ通一々兼引致し候共時々江
戸表ゝも立歸り居不申ゝ而を相成間敷哉ふ
上を五十歩百歩ゝ論こ而往復逢中ゝ拙念も
有之其都度々御軍艦こ而送迎も行屆申間

海舟書屋

敷哉就而を昨十三日法用出役人數増等仕置
い通こ而先治差至ゝ方可然哉奉存ゝ私とも
一同評議仕ゝ趣書面ゝ通御座ゝ以上

我邦の初て外人と訂約をふ數百年来鎖國
ふ安を除國民ふ立てを是を嫌忌をふ事素
らり當然の事也況や當時ゝ議者多くを支
那の近事を誤想し外人を嫉むを仇讎乃如
く動もをれを危言激論をふして人心を煽

動し其不利を喋々する者多きふ於てをや
開港已来外國人を暗殺し以て両國乃交誼
を妨害せんと謀る者一ふして是らも是實
ふ一狂夫の小勇ふして却て甚卑怯小膽を
表白するふ過きざるのみと以へ共此狂夫我
して爰ふ至らしむる者當局者も亦決して
其責を逃るゝふと能はざる外交乃事政府務
めて其事を秘し他をして知らしめざる又每
事取締々々として其交通ふ障壁を設けて内
外を隔隔し互に其面を識らしめざる況や言

海舟書屋

語を交ふとさへふる者れハ固より其心情を知
るふ由なく偶逢上高帽濶歩して過ると見る
ハ忽ち驕慢無禮と罵り或ハ甚應答の言語を
傳聞するハ桀驁我を侮るとなし種々の想像
をなされを憎むの念以ようて深く其結果終
ふ内ゝに至ると謂ハるを得ざる思ふふ當時
乃有司外ふ云ふ色から さる事情も有りて人心
の擾動を恐りて此事ふ及ひしと雖以へ徒ら
隱蔽して世の耳目を瞞せんとするハ却て人
心乃擾動を促を拙策と云ふし彼の當時取締

と名付るものハ概ね外人をして我ら國民ら
親昵せし免さるゝ主意ふして真の取締ヲに
あらさ然らさるハ度々殺傷を企る罪人ふし
て一も捕獲せられさりしを見ても知ぬ
支那敗代のむかし凡有辜罪乃圉恒獲と尚書
小見ゆ衰季乃常態彼我古今千載一轍乃如し
と云ふ

開國起原巻二十三

海舟書屋